

大阪市立市岡東中学校

元気アップ便り

元気アップコーディネーター 千葉清二

こんにちは。6月に入りました。近畿地方では5月下旬から梅雨入りとなり、しかも6月も例年並みの雨量の予想でこの時期はやはり「食中毒」に気をつけなければなりませんね。しかし、反面夏の水不足やコロナ予防には効果があると聞きますし、よい面もあるのですね。

ところで、昔の童謡で、この時期の農村の様子を見事に歌詞にした「夏は来ぬ」があります。若いみなさんも一度はどこかで耳にしたことがあるのではないのでしょうか？

1 番「卵の花の 匂う垣根に時鳥 早うも来鳴きて 忍音もらす 夏は来ぬ」

2 番「五月雨の そそぐ山田に早乙女が 裳裾ぬらして 玉苗植うる 夏は来ぬ」

3 番「橘の 香る軒端の窓近く 蛍飛びかい 怠り諫むる 夏は来ぬ」

以下5番までありますが、紙面の関係で省略します。

この歌は明治26年（1896年）作曲者の小山作之助が当時の歌人でもあり、「万葉集」研究の第一人者であった佐佐木信綱に「日本的な歌を」と依頼したものです。

国語の勉強にもなると思いますので簡単に解説をしますと、1番の卵の花は夏に白い花を咲かせる「ウツギ」の別名です。ここで「匂う」は確かにウツギはいい匂いもしますが「卵の花の白い色が美しく映える」という意味とされます。「忍音」はその年の最初のホトトギスのさえずりのことです。

2番は「五月雨」は梅雨のことで、娘が裳裾（着物のすそのこと）が濡れるのもかまわず、一生懸命に田植えに精を出す情景です。

3番の「橘」はミカン的一种、次に「蛍が怠り諫むる」の意味は中国の晋の時代の蛍の光でも勉強したという故事から「蛍雪の功」のことです。怠けることを戒めていて、卒業式のときに歌う「蛍の光、窓の雪」もその意味です。「蛍雪の功」のことわざは、高校入試でもときどき出題されます。

いずれも五七五七七の短歌形式となっており、最後に「夏は来ぬ」で締めくくっています。ところでこの読み方は「夏は来ぬ」ではありません。「こ」と読むと未然形なので「ぬ」は打消しの意味になってしまいます。連用形の「き」と読むと、この「ぬ」は完了の助動詞となり、「夏がやって来た」となるのです。詳しくは国語の授業で聞いてくださいね。

元気アップ学習会のお知らせ

この「元気アップ便り」の前に、3年生のみなさんに、6月の学習会の予定を配布しました。

この予定表にも掲載されていますが、6月中旬には実力テスト、月末には期末テストがあり、それぞれの対策に力を入れた学習会を実施しますので、ぜひ参加しましょう。